



|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 住み込み型研究室滞在を通してみる江差町の資源と可能性 : 過疎化地方小都市におけるまちづくりの活性化支援に関する研究                        |
| Author(s)        | 浦野, 宏美; 森, 傑; 野村, 理恵                                                              |
| Citation         | 学術講演梗概集. E-1, 建築計画I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎, 2011, 1077-1078           |
| Issue Date       | 2011-07-20                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/54918">https://hdl.handle.net/2115/54918</a> |
| Rights           | 日本建築学会. 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである.                                         |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | AIJ.E-1(2011).1077-1078.pdf                                                       |



# 住み込み型研究室滞在を通してみる江差町の資源と可能性 — 過疎化地方小都市におけるまちづくりの活性化支援に関する研究 —

正会員 ○ 浦野 宏美\*  
同 森 傑\*\*  
同 野村 理恵\*\*\*

住み込み 学生参加 江差町  
過疎地域 活性化 まちづくり

## 1. 背景と目的

近年、地方小都市の人口減少と高齢化に伴い自治体の財政難が深刻化している一方で、意欲的なまちづくりの事例も増えつつある。北海道大学建築計画学研究室でも、過疎地域であり平成19年度から早期健全化団体<sup>注1)</sup>に指定されている北海道江差町に注目し、まちづくりの活性化支援に取り組もうとしている。本稿では、その足がかりとして行った「北大 江差まちづくりサテライト（以下、サテライトとする）」の設置を中心とした約1カ月に渡る住み込み型の研究室滞在を通して把握した江差町の資源と可能性について述べるとともに、まちづくりにおける今後の課題について考察することを目的とする。

## 2. 北海道江差町概要（図1参照）

江差町は、道南に位置する北海道で最も古く拓けたといわれる町で、檜山振興局の所在地である。市街地は鵒島を中央とした両翼に形成され、海岸沿いの下町と海岸段丘を上がった丘陵地の上町とに大きく分けられている。日本最古の祭である姥神大神宮渡御祭を有す歴史や文化の残る町である。人口は1965年の15,380人をピークに2008年現在9,538人となっており縮小傾向にある。

## 3. 住み込み型研究室滞在の概要

町民と学生の相互理解および町の現状とまちづくりに対する姿勢の把握を目的に、2010年10月4日（月）から29日（金）の約1カ月間にわたり滞在した。なお、滞在は修士1年7人（留学生2人を含む）および学部4年生3人の学生が入れ替わりで行った。活動場所は、元・町役場

であり現在は無料休憩所として利用されている町会所会館（写真1）にサテライトを設置し、自治体所有のお試し暮らし住宅（写真2）を居住場所とした。また事前に自治体を通して町内全4500戸に対し滞在とプログラムを案内するチラシを配布し滞在を周知した上で活動を行った。

## 4. 活動の様子

滞在中は大きく以下の4つのプログラムを行った。学生が常駐し町民を迎える「サテライト」と、それに対して学生自身が町内を巡る「まちあるき」は、町民と話す機会を設けるため実施した。「江差再発見」は町民が自らの町を再認識する機会を設けるため、「持ち寄りランチパーティ」は町民とのより深い交流のために実施した。

### 4-1. 北大 江差まちづくりサテライト（写真3）

町会所会館にて恒常的に行うプログラムである。江差町市街地の1/2,000模型を作製しながら、来訪した住民や観光客とふれあい、情報交換や滞在の成果の報告を行った。

サテライトでは、町民が学生に対し模型を用いて積極的にまちのなりたちを説明する姿や町の見所までの経路を教える場面があった。来訪者には優先的に自宅の模型

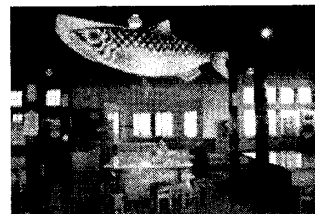


写真1. 町会所会館



写真2. お試し暮らし住宅

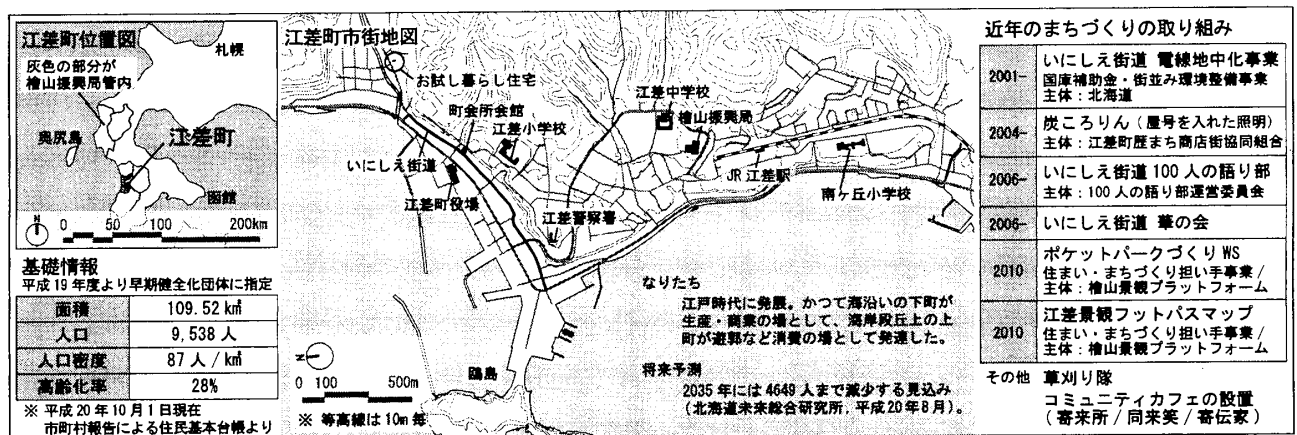


図1. 江差町概要

Resources and Potentialities of Esashi through the approach of living in the town :  
Support of revitalizing on the machizukuri activities in the under-populated small cities

URANO Hiromi\*, MORI Suguru\*\* and NOMURA Rie\*\*\*

を作製すると、再度来訪した際に同行者に自慢する姿も見られた。また「若い人の意見を聞きたい」と個人の活動について相談に訪れる住民や、収集した古地図や屋号などの資料を提供しにくる町民もいた。22日間でのべ336人(うち130人は観光客)がサテライトを訪れた。

#### 4-2. まちあるき

①町内を自由に散策しながら出会った町民とふれあうものと、②町民を訪問し、知り合いを紹介してもらいながら暮らしの様子をリレー方式でインタビューするものからなるプログラムである。

これらの活動は、町民の日常や生活不安を理解する助けや、出会った町民がサテライトに来訪するきっかけづくりとなった。具体的な意見としては、町に若い人の働き口や遊ぶところがないという声や、観光業のあり方に苦慮する声などがみられた。まちづくりに関しては、行政の先導を求める声がある一方で、行政に頼らずに町民で動かなければいけないという声など両極の発言がみられた。なお②のインタビューは18組に対して実施し、リレーの記録はサテライトに随時掲示した。

#### 4-3. イベント・江差再発見(写真4)

「私の江差」をテーマにした写真コンテストである。10月17日(日)に実施し、当日参加者が町内を回り撮影した写真を24日(日)の表彰式までの1週間サテライトに掲示して町民や観光客による投票を行った。13人7組(外国人旅行者2人1組と学生1人を含む)が参加した。

撮影された対象は、古いまちなみなどの歴史を感じるものや、海や船、鷗島が多く、自分だけの知るビューポイントからの風景がよく見られた。掲示した写真を眺めながら町民同士で撮影場所を推測する姿などが見られ、町を改めて見るきっかけになったと考えられる。イベントに参加した小学生は投票期間中は毎日サテライトを訪れたため、学生に促され観光客に投票を働きかける姿が見られた。なお全体で476票の投票があった(ひとり最大5票とした)。

#### 4-4. 持ち寄りランチパーティ

料理を持ち寄り、サテライトにて町民と学生と一緒に昼食をとり、交流を図りながら食文化を知るプログラムである。

滞在開始当初にあった実施困難を予想する役場職員らの声のとおり、滞在前に配布したチラシによる告知のみで参加に至る町民はごくわずかであった。しかし、滞在とともに認知度が上がるにつれ次第に町民の参加が増え、後半になると学生の誕生日を祝ったり、メンバーの交替を期に郷土料理で学生をもてなす姿などが見られた。26日間で12回の開催となった。



写真3. サテライトの様子



写真4. 江差再発見の様子

#### 5. 滞在中を通過してみる江差町の資源と可能性

活動の全体より認識された、まちづくりにおける江差町の資源と可能性について考察する。

##### 5-1.) 江差町の資源

###### a. 見守り気質

滞在中、学生の活動や生活を援助する町民の行為が随所に見られた。例えば学生に会うたび不便なことはないか尋ねてくれる町民や、毎日のようにサテライトに寄り様子を気にしてくれる町民がいた。また毎朝サテライトの掃除をするよう町民に促され、以後の習慣となったという出来事もあった。これは、各々の能力を活かし助け合うことができ、同時にルール共有化を推進する力となる気質であると考えられる。

###### b. 密なパーソナルネットワーク

町民が、告知していないような学生の詳細な活動状況を認識していると思われる出来事もいくつか見受けられた。例えば活動中に訪問していた家に電話がかかってきて伝言を受けたり、ある町民に話したことを翌日別の町民が知っていたなどがあった。また学生その日の活動内容を耳にし伝言を頼むなど、学生を介した情報のやりとりも見られた。これらから、町民は強固な情報伝達のネットワークを持ち、また町民間のコミュニケーションが活発であるということが考えられる。

##### 5-2.) 可能性

今後のまちづくり活動では、以上のような資源を活かすと、手間がかかるプログラムでも運営できる可能性がある。祭時などの宿泊施設不足という問題を抱えている一方で、宿泊施設を作っても閑散期は経営が成り立たないと見込まれている江差町においては、例えば有志の町民により団体を組織した上での持ち回りによる宿泊施設の運営などが考えられる。これを行うことにより町民が危機にいた観光業への不安や若者の働き口などの問題が改善に向かう可能性もある。またこれを契機に現在単独で行われている各事業の連携を促すことで、町全体の利益へつなげる関係が築けるようになるのではないかと考える。

#### 6. まとめ

本稿では、住み込み型研究室滞在中を通過して明らかとなったまちづくりにおける江差町の資源と可能性を示した。しかし、これらは次のような課題と表裏一体であることに留意したい。まず濃密なネットワークは、他のコミュニティに属することを疎外したり、コミュニティ間の対立を呼ぶ可能性がある。次に見守り気質に関しても、例えば滞在中ランチパーティ以外にほぼ毎日夕食まで町民の方々にご馳走になっているが、それも特定の町民による提供であることに課題を感じる。なお、江差町においてはコミュニティ形成が上町・下町といった地形的条件に由来する部分もあると考えられるため、地域拠点等を設ける場合は立地条件も重要な論点になるであろう。

注1) 財政健全化法に基づき、自治体財政の健全さをはかる4指標のいずれかが、一定値を超えると指定される。財政破綻のレッドカードを示す「財政再生団体」の一手手前の段階で、イエローカードと称される。

\*) 北海道大学大学院工学院 修士課程

\*\*) 北海道大学大学院工学研究院 教授・博(工)

\*\*) 北海道大学大学院工学研究院 助教・博(学術)

\* Graduate Student, Graduate School of Engineering, Hokkaido University

\*\* Prof., Faculty of Engineering, Hokkaido University, Ph. D. in Eng.

\*\*\* Assis. Prof., Faculty of Engineering, Hokkaido University, Ph. D.